Osaka Shoin Women's University Repository
The Human Science Research Bulletin
2004, No. 3, 49-55

涙に関する臨床心理学的研究（1）

―― そのコンセプトにかかわって ――

心理学科　上野　矗

要約：本論は，人がその心の内に描き抱く涙のコンセプト或はイメージに関して現象学的視座から検討しようとする。自己コンセプト或はイメージに迫る Kuhn M. H & McPartland T. S の 20 答法にならい，涙のコンセプト調査票を作成し，これを大阪樟蔭女子大学学生 54 名に実施した。得られた資料は，Duquesne 大学の経験的現象学的方法によって意味分析された。

その結果，次のような知見が導き出されてきた。

1. 涙コンセプトは，客観的側面（事項）；象徴的イメージ；いつ，どこで，なぜ涙が流れるか；涙の人にとってもつ意味や効用の 4 つの意味体験カテゴリーから構成されている。

2. 人の涙に対する態度やあり方には，肯定・開示・親密の態度をとる場合と，逆に否定・閉鎖・疎遠の態度をとる場合とが類別された。

涙のコンセプトに関する本アプローチは，人の心の内に迫り，臨床心理学上，人の援助的理解をはかるのに有意義な示唆を与えるものであると考えられた。

Keywords：1）涙：Tears　2）経験的現象学的方法：An empirical phenomenological investigation　3）涙コンセプト：Tears-image or-concept

涙に関するこれまでの研究概観

心理学は 19 世紀初頭に開花した自然科学の客観的方法を自明の道理として適用し，科学としての成立をはかり，その成果を上げてきた。そこでは，専ら，その性質が静で，対象化しやすい知にかかわる感覚，知覚，学習，思考といった心理諸機能の解明がなされてきた。しかし，情意にかかわる感情，欲求，意志といった心理属性には必ずしも取組まれてこなかった経緯がある。情意，とりわけ感情は主観的で，その性質が動であるため，対象化できず（感情は対象化すると感情自体がそれでなくなってしまう），客観的方法になじめなかったためである。

ただ，生体機構と密接する感情とくに情緒は，丁度 James-Lange 説に依拠するかのように，生理諸指標に還元され，ポリグラフによる生理心理学的な解明がはかられてきた。また行動機構と密接する情緒はこれに相応する表情や行動となって現われてくる。そのため，情緒は，これに相応する表情や行動に焦点づけられ，外見可能で，対象化され，客観的方法による解明が可能となってくるのである。

涙が情緒の表出や意思伝達の意味をもつ泣く行動に随伴する事象であるとき，泣く行動に焦点づけ，これに客観的方法によってアプローチし，その研究成果を上げてきたことは容易に推察される。

実際，後に紹介する Kottler J. A の涙に関する研究概観にふれると泣く（涙）行動が発達・成長の過程を経て社会的行動となってくること；泣く（涙）行動が情緒の表出や意思伝達の機能をもつこと；これにからんで，性差，人格特徴，社会化過程や文化また宗教等によって，情緒の表出や意思伝達の仕様に違いがみられること；そして，

Osaka Shoin Women's University Repository

よい泣く（涙）行動を目指して，いかにこの行動をコントロールしていくか；これらにかかわる実験的また調査的研究がなされ，その成果が積み上げられている[1] ことが知られる。

そして，この Kottler J. A が「The Language of Tears」を刊行し，臨床心理学の立場から涙の問題に触れたのが印象的であった。そこでは，涙（泣く）行動に関して，医学から心理学を経て文化人類学に亘って概観する一方，臨床心理学の立場から，涙を言葉の体系とみなし，涙が伝達するメッセージを明確に受け取ることを学ぶ必要を提言する。その際，涙はあふれる情緒であること，涙は健やかさにかかわること，涙には真実と虚偽がからむこと，涙は恥や親しさともからむこと等の局面[2] をもち，涙は，文化，性，宗教，発達，対人関係上のルールのもと，生活の文脈で生起するように，その文法・構文がある。涙の文法・構文にそって，その意味するところを解読していくことが重要となる[3]。

この著書を通じて，生活の只中を生きる人への臨床心理学的営みの充実をはかるうえで涙がひとつの鍵概念となることが示唆されてくる。ただ，涙が心の内に動く情緒の表出や意思伝達の機能をもちうるとき，その涙の意味を解読しようとするとき，研究者中心の客観的視点とあわせ，涙する人の心のうちの迫る相手中心の視座が重要であるにもかかわらず，この視座が必らずしも明確にされていない。

問　題

上の涙に関するこれまでの研究概観をふまえ，本論では，相手中心の視座のもと，生活の只中を生きる人の心の内に出来る限り近くあるがままに迫る現象学的方法から，人が涙というとき，いかなる受けとめ方をし，どのようなコンセプトやイメージをその心の内に描き，抱いているのかに関して検討するところから始める。

ところで，涙には 3 種あるという。第 1 は目を保護し，その働きを円滑にする生理的で持続的な涙である。第 2 は物理的（コンタクトレンズ等），化学的（玉ねぎから発散される硫酸等）等の外的刺激による涙である。そして最後は情緒によって喚起される涙である[4]。その際，涙は泣く行動に随伴する事象で，私たちにとってポピュラーで，同時にミステァリアスな事象であるというとき，それは専ら第 3 の情緒によって喚起される涙を指している。勿論，こうした理解は間違いがなく，それで涙に関するこれまでの研究展開がはかられてきたのである。

しかしながら，こうした理解は客観的方法が依拠する二分法思考に由来し，“涙ゆえ泣くか，泣くゆえ涙か”といった果てしない循環論を招く。そして涙に対する横断面的な発想から研究者の専門領域によるアプローチへ展開せざるえないことになる。だが，一度（ひとたび），涙する（泣く）人に焦点づけるならば，局面は一変する。

私たちがこの世に誕生し，生きていくうえで何よりも第 1 にしてきたのは涙（泣くこと）である。それは産道を出る痛み，ショック；外界に初めて触れる不快感，怒り，恐怖といった感嘆の表出であり，同時に心身とも健常に生きる意志の現われでもあった[5]。ここに，私たちにとって，生きていく上で必須な心身融合・統合としての涙（泣く）の原体験がある。

このことをふまえるなら，涙は，心身融合・統合にある「私」を実在的・実感的に証明・確認させてくれる感情・情緒の表出であり，「私」を語り伝える意味ともなろう。私たちの経験は涙によって規定される所以でもある[6]。

かくして，本論で課題とした人が心の内に描き抱く涙コンセプトへのアプローチは，生活の営みの只中で人にとって涙がもつリアルな意味を導き出し，その人の「私」を語り伝えるところに光を当てるに違いない。そして，こうした課題・アプローチは援助的理解をはかる臨床心理学の研究・

Osaka Shoin Women's University Repository

実践に示唆的な知見の導出に資してくるに違いない。

方　法

人がその心の内に描き，抱く涙のコンセプトに迫るについて，ここでは自己調査票を創始したKuhn M. H. & McPartland T. S. らの 20 答法（Twenty Statements Test）[7] にならい，涙を刺激語とする自由記述を求める手法が適切であると考えた。

そして，大阪樟蔭女子大学女子学生，2，3 回生 54 名（年令 19 才〜21 才未婚）に，「涙というとき，あなたの心に思い浮かんでくる事項を自由に箇条書きして書き出して下さい。出来る限り沢山書き出して下さい。記述時間は 15 分に制限します」という調査票を実施した。

記述されてきた事項を，Duquesne 大学による経験的現象学的意味分析法（An empirical phenomenological investigation）[8] にならい，熟読し，その心の内に描き抱かれた涙コンセプトを構成する意味カテゴリーの抽出をはかった。その際，本調査票用紙に主題に関する記述する際の構え及びその自己表明（記述）にかかわって，用紙内の記述の布置関係，書字の仕様，記述内容への着想や関与の仕様等を手がかりにして，あたかも記述者になってなぞらえ，各被調査者（記述者）の記述する背後に動く心情に触れるようなアプローチを試みた。

結果及び考察

1. 書き出された記述総数 515 の事項について，方法の手続きにそって読み取り作業を行い，涙コンセプトを構成する意味体験カテゴリーの抽出をはかった。その結果は次の通りである（表 1 参照）。

表 1 から，涙のコンセプトは，涙に関する客観的側面（事項），涙に関する象徴的イメージ，涙

表 1　涙コンセプトを構成する意味体験カテゴリーとその記述数と比率

意味体験カテゴリー	記述数	比率%	事項例
涙に関する客観的事項	46	8.9	目の保護のためにある 玉ねぎで起る　目がはれる
涙に関する象徴的イメージ	35	6.8	汚れ　しょっぱい　きれい 美しい　純粋　暖かさ
涙が流れる とき　否定的 162 記述数 肯定的　91 場　否定的　64 肯定的　31 理由　否定的　21 肯定的　21 計　否定的 247 肯定的 143	390	75.7	悲しい　悔しい　辛い　怒り うれしい　喜び　感動 別れ　失恋　死別　けんか 読書　ドラマ　勝つ　合格 感情を揺さぶられて無意識 笑い過ぎ　わかってもらって　感情を揺さぶられて
涙がもつ意味や効用 とても大切なこと 6 ストレスの発散解消 15 人との関係をつなぎ，相互に揺さぶる 6 自他の道具になる 5 社会的規範による抑制 6 自己防衛的にする 自分を語り伝え自己の再構築の契機となる 6	44	8.5	涙してすっきりする 人の涙で気持が揺さぶられる 女の武器になる　涙で偽わる 恥しい　みられたくない 離婚した父を憎んでいたが憎しみの涙を流しているうち父を許せる気持になった

Osaka Shoin Women's University Repository

が流れる（いつ，どこで，なぜ涙が流れるか），そして涙がもつ意味と効用の4つの意味体験カテゴリーから構成されていることが知られる。

その際，総記述数515中，涙が流れるカテゴリーが390記述数，その百分比が75.7％で，他のカテゴリーより有意に多いことが知られる（CR＝12.81 p＜.01）。

涙が流れるカテゴリーの390記述数の中，ときの記述数が253あり，その百分比が64.8％で，他の場や理由より有意に多いことが知られる（CR＝7.35 p＜.01）。また涙が流れるカテゴリーの390記述数の中，否定的の記述数が247あり，その百分比が63.3％で，肯定的記述より有意に多いことが知られる（CR＝6.60 p＜.01）。

涙が流れるカテゴリーで，ときの253記述中否定的記述数が162あり，肯定的それより有意に多い（CR＝46.33 p＜.01）。また場の95記述中否定的記述数が64あり，肯定的それより有意に多い（CR＝3.19 p＜.01）が，理由では否定・肯定の記述数が均等となっている。

この結果にみられるように，涙が流れるカテゴリーが量的に多いことは，人が涙に関して，いつ，どこで，なぜ流すのかに関心にあることを伝えている。それは，涙が私たちにとってポピュラーであり，同時にミスティアリアスであるというとき，涙がいつ，どこで，なぜ流れるかに関心があることを表わしているように思われる。そのなかでも，涙がいつ流れるかのときに関心が集まっていること，また涙が流れるのは悲しい，別れに代表されるような否定的な色彩のもと描かれ抱かれていることが知られる。

上にみてきたように，涙が流れるカテゴリーは量的に注目されたが，他のカテゴリーは量的にはほぼ均等して涙コンセプトを構成している。

涙に関する客観的局面（事項）が涙コンセプトの構成カテゴリーにみられるのは，精神発達の健常さの指標を意味するとともに，誕生時の泣く・涙による心身の健常な生を果している証明の確認の意味をもつもののように思われる。なお，涙コンセプトを構成する意味体験カテゴリーの抽出に当って，客観的局面（事項）と分化させているが，一部を除くと，これが他の主観的事項の諸カテゴリーと記述者の人格のうちにひとつに融合・統合し，涙コンセプトの構成の局面と位置づけられることを付言しておきたい。

涙に関する象徴的イメージカテゴリーは，上の客観的局面（事項）と同じく，精神発達の健常さの指標の意味をなす。またこのカテゴリーには，きれいに代表されるような肯定的イメージが数的に多くみられたが，有意な差はみられなかった（35記述中，肯定的イメージ22記述数，CR＝1.44 Nonsig）。

最後に，涙がもつ意味や効用のカテゴリーには，量的な吟味・検討よりもむしろ質的な吟味・検討がなされるべき知見が含まれている。日常の生活経験を含め，とりわけ臨床心理学上の課題が盛込まれているからである。

まず第1に注目されるのは，涙は人にとってとても大切なことであるとの意味づけである。涙は，誕生以来心身の健やかな生を営み，プロセスを経てきたことを含んで，心の内奥から「私」の実在感を与え，確認させてくれ，この「私」（心の内実）の「私」ならではのかけがえのない自己表明の意味をもつことになるからである。

第2は，涙が，人間対人間の関係，とりわけ援助的理解をはかる対人・対話関係の成立とその展開上重要な契機たりうるとの意味づけである。自分の涙で相手を揺さぶるし，相手の涙で自分が揺さぶられるといった仕方で対人関係をツナギ，その涙の意思を発信・伝達し，対話交流がはかられるのである。

第3は，涙が自他の援助的理解の具体化に大きな力となりうるとの意味づけである。“祖母が亡くなったときの父母の涙するすがた”に思いが及ぶように，涙は，自分のこれまでの生活体験に関するエピソードへの回帰をはかり，当時はたとえ

Osaka Shoin Women's University Repository

否定的な思いのものであっても，現時点では自分へのいたわりや力づけの源泉となるのである。また“離婚した父を憎んでいたが，あるとき，憎しみの涙を流しているうちに，父を許せるような気持ちになれた”というように，とりわけ，否定的色彩の涙を真に涙するなかで，否定的色彩の気持が肯定方向に動く（否定感情：－を肯定感情：＋にしようとすると，－×＋＝－のように，否定感情を強めるが，否定感情をそのままに，あるがままに表明すると，－×－＝＋のように，肯定感情の方向に動く）との感情の性質にそった涙の表出は，癒しをはかる大きな力となるのである。さらに，“彼が私のために流してくれた涙”のように，こうした涙は自分にはかり知れない力づけや癒しの意味となると同時に，相手を勇気づけ，自信を与え，癒しの意味ともなる。このように涙は対人・対話関係のなかで援助的理解の意味ともなりうるのである。

以上，涙は，人の心の内奥に根ざして，このように触れてきた重要で肯定的な意味づけや効用をもつのである。しかし，丁度ステロイド剤がそうであるように，涙は，上の重要で肯定的な意味づけや効用をスポイルしかねない難解で否定的な意味づけや効用があることをここで明確にしておかねばならない。

そのひとつは，確かに涙にはストレスの発散・解消の効用があるが，これにからんで，涙の表出に社会的・文化的規範によるコントロールやその精神内力動に触れて自己防衛的な抑制作用が働くことである。涙の表出コントロールや抑制といったことは人・時・場がからむ生活文脈の流れに応じて当然必要なことである。そこで生活文脈の流れにそって，涙の表出に関する適確なる見定めの判断が要請されるという難解な課題に直面することになる。いえば臨床心理学上の場のもとでは，涙の表出は出来る限り自由であることが原則である。こうした場のもとで，臨床心理家を始めクライエントが涙の表出にかかわる適確なる見定め判断が出来るようになるなら，それは臨床心理学に果たす寄与ともなるであろう。

他のひとつは，涙が道具に用いられ，心の内実の偽装の意味をもつことにからみ，涙に盛込まれた意味を解読していくことの至難さがあるということである。涙がミスティアリアスであるといわれるように，涙にはここでみてきたように様々な意味が盛込まれているにもかかわらず，その意味は眼にみえない。援助的理解をはかるとりわけ臨床心理学のもとでは，涙の真なる意味を解読していくことは要請課題となろう。その際，涙が図柄だとすれば，その背景となる人・時・場がからむ生活文脈の流れを把握することが肝要なこととなるに違いない。

2. 20 答法にならった涙のコンセプトの本調査実施を通じて，記述の背後で動く被調査者の心情，とりわけ涙に対する構えやあり方が推察されてきた。本調査票の主語，涙という刺激語は，人（被調査者）にとって，その人の生活文脈の流れにそって，その心の内になにがしかの感情体験を触発させる契機を内包させていたように思われる。そこで，触発された感情体験（涙）或はそう触発された自分に人は反応する。この反応が推察される涙に対する構えやあり方であるように思われるからである。その際，触発された感情体験や自分に肯定か否定か，開示的か閉鎖的か，心理的に近い（親密）か遠い（疎遠）かといった自我指標を反映していることがみとることができる[9]。

被調査者 54 名について，個別にこうした検討を加えた結果は次の通りである。

まず，被調査者 54 名中 44 名が，涙という刺激語に応じて，自分のことと受けとめ，涙（感情体験）という世界に自由に入り込んで，自己表明（記述）していくのである（CR＝5.08 $p<.01$）上の自我指標でいえば，肯定・開示・親密に該当するもののように思われる。

次に，被調査者 54 名中 4 名は，触発された涙（感情体験）や自分に用心深く，警戒的になっ

Osaka Shoin Women's University Repository

て，“泣くのは未熟だ”とか“涙は流したくない”といった表明に代表されるように，涙（感情体験）にかかわる自己表明がきわめて強くコントロールされ，抑制されている。上の自我指標でいえば，否定・閉鎖・疎遠に該当するもののように思われる。

第3に，被調査者54名中3名は，触発された涙（感情体験）や自分に応ずるには余りに内省的で懐疑的に陥いっている。“涙を信じきれるか”といった表明にみられるように，感受して応ずるいき方でなく，頭で考え答えるいき方をとっているからであろう。

最後に，残り3名は，涙という刺激語に対して応じず，自分を中立の客観的位置におき，“涙は液体”といった具合にことがら的記述をし，そこに「私」を盛込まない。このあり方は，研究者のように客観主義を信奉しているのか，第2のグループにみられるように，客観主義をとることで自分を守っているのかそのいづれかであろう。

以上から，涙に対する人の構えやあり方が4つ類別されてきたが，このことは本調査が被調査者のあり方に迫り，そこから援助的理解をはかるうえで，きわめて示唆的な知見を導きかつ有効であることが示唆される。

ちなみに，否定的評価に傾きがちで，触れることに抵抗を感じさせる涙に応じ，自分のことと受けとめ，その世界に自由に入り込んで自己表明できる力（自我指標でいう肯定・開示・親密）を人間的な健やかさの証しとみなすなら，本調査の被調査者54名中該当者が44名であるとき，人間的な健やかさにある者が有意に多いことが知られる（CR＝5.08 p＜.01）知見などその1例でもある。

また，最後の客観主義のグループに入っている1人が，本調査終了後，寄って来て，“私，最近涙を全く流してなかった”と涙している本人のすがたに触れ，本調査結果を越えて，本調査実施自体が人には援助的理解実現の契機たりうるとの印象を深くしたことを追記しておきたい。

文　　献

1） Kottler J.A. 1996 The language of tears, Jossey−Boss Publ. pp. 221〜232.
2） Kottler J. A. 1996 前掲書 pp. 1〜23.
3） Kottler J. A. 1996 前掲書 pp. 24〜49.
4） Kottler J. A. 1996 前掲書 p. 62.
5） Kottler J. A. 1996 前掲書 pp. 59〜61.
6） Kottler J. A. 1996 前掲書 pp. 16〜17.
7） Kuhn M. H. & McPartland T. S. 1954. An empirical investigation of self-attitudes, Amer. soc. Rev. 19, 68〜76.
8） Giorgi A 1985 Sketch of psychological phenomenological method, Giorgi A Edt. Phenomenology and psychological research.Duquesne Univ. Pr. pp. 1〜22.
9） 上野矗：1984「体験学習：気づきの自由な話し合い」の援助的理解実現に及ぼす効果－自我指標を中心とした検討－大阪教育大学紀要，Vol.33（No. 1）25〜34.

Osaka Shoin Women's University Repository

Study on Tears-concept or-image from an Empirical Phenomenological View-point (1)

Osaka Shoin Women's University
Hitoshi UENO

ABSTRACT

In this paper, tears-concept or-image that person pictures in one's mind is examined from an empirical phenomenological view-point. Tears-concept inquiry is carried out to 54 students at Osaka Shoin Women University. In this inquiry, Subjects are asked to write out freely items about tears that they picture in their minds.

Obtained datum are investigated through an empirical phenomenological method of semantic analysis. Following results are found:

1. Tears-concept or-image consists of 4 categories, that is, objective aspects of tears; symbolic image of tears; when, where, why does person shed tears?; meanings and effects of tears for person.
2. It is found out that there are two attitudes toward tears: one is the positive, open, intimate attitude to tears, another is the negative, close, objective attitude to tears.

This study seems to make a contribution to understanding of the inner world of human being.